

第1章

人間は

宇宙の産物



皆既日食寸前の太陽

宇城師範の気による指導は、
従来の科学のように仮説から始まるのではなく、
「やってみせる」という、事実先行で展開されています。
それは、今の科学では説明がつかない次元にある一方で、
誰がやっても同じ（客観性）
何回やっても同じ（再現性）
その本質は変わらない（普遍性）
という法則性を実現しています。
従来の分析科学が行き詰まりつつあるこの時期に、
新しい光を灯すニュー科学とも言えます。
その根源にあるのが「気」の存在です。
不可を可とする「気」とは一体なにか——
宇城師範は、それは「時間」にあると言います。
第一章では、身体から導き出された気の理論の一端を
ご紹介します。

人間は、 地球生命の38億年を 凝縮して生まれてくる

宇宙誕生 (137億年前)

銀河誕生 (129億年前)

太陽系誕生 (46億年前)

生命誕生 (38億年前)

人類誕生

母親の胎内で受精

10ヶ月

人間は生まれながらに完成形

宇宙の誕生は 137億年前
銀河の誕生は 129億年前
太陽系の誕生は 46億年前
地球上の生命の誕生は 38億年前
人間一人の誕生は 10ヶ月

生命はこのように、今に至るまでずっと進化してきました。

私たちは母親の胎内で受精と同時に生命を得て、わずか10ヶ月の時を経て生まれてきます。その10ヶ月の間に目や耳、鼻をもった顔、そして手足や心臓、肝臓などのあらゆる臓器ができ、60兆個の細胞をもった完成形として生まれてくるのです。同時に、そこには38億年という生命の進化が凝縮されて私たちに移されてきます。

つまり、私たちの生命は、この38億年の時間軸上にあるというこ

となのです。

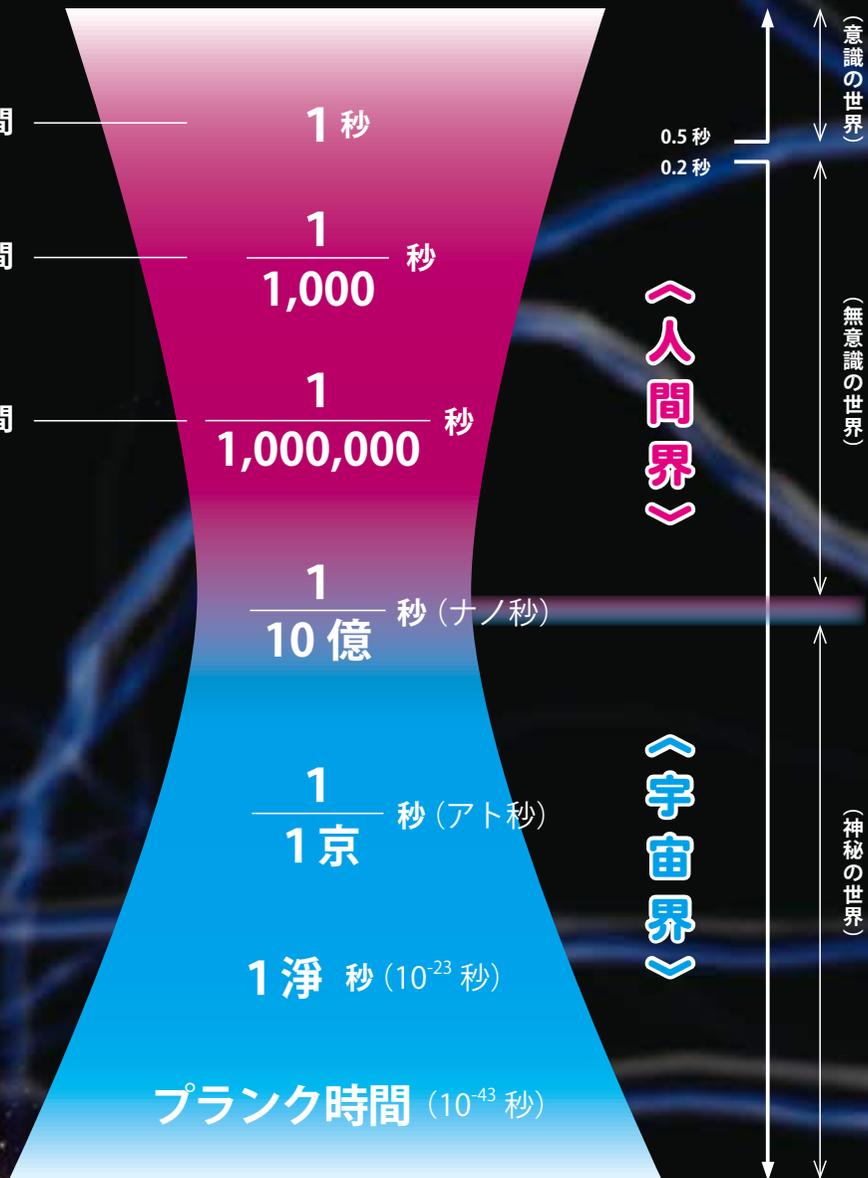
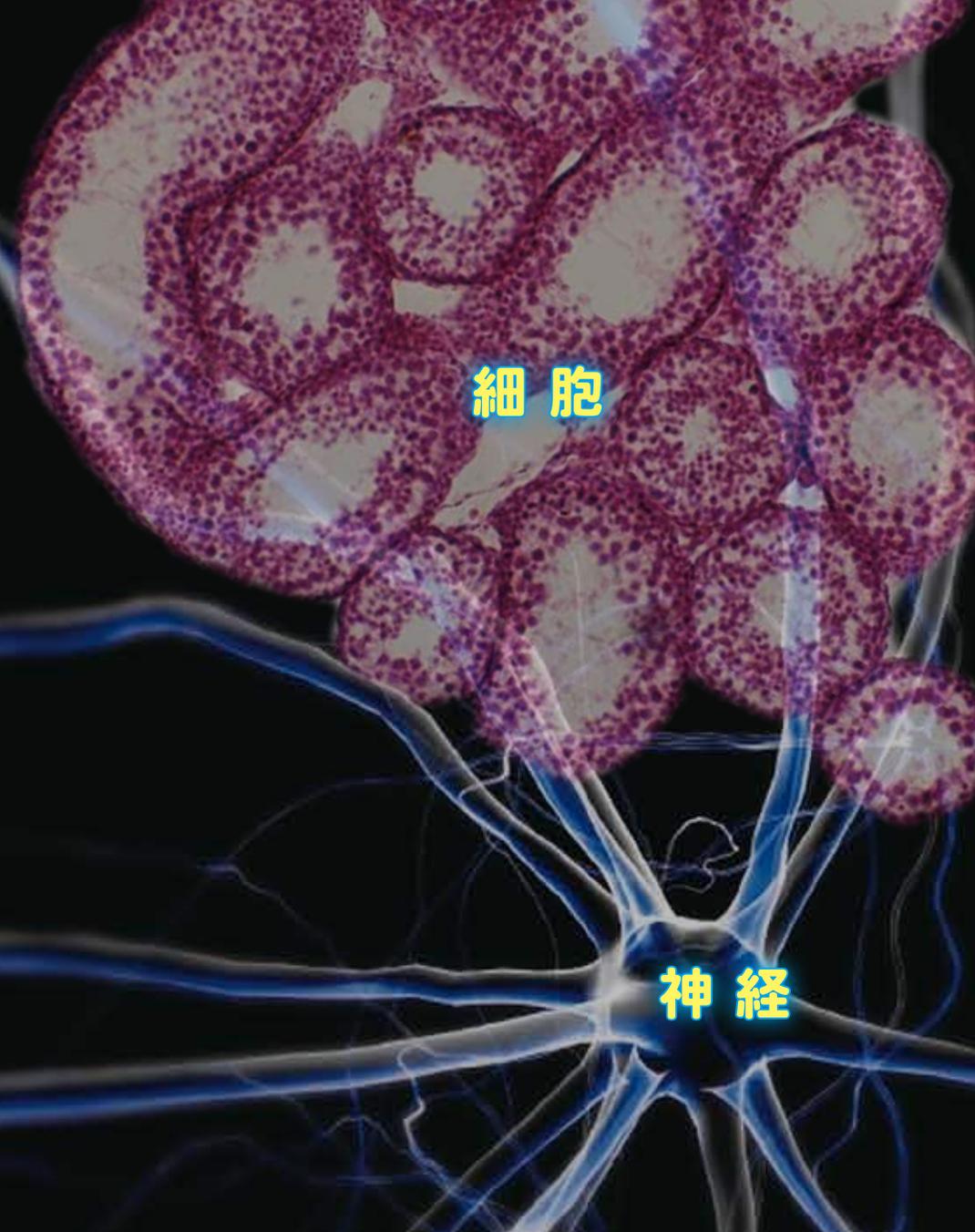
さらに私たち人間は、60兆個の細胞と、その細胞一つひとつに刻まれた宇宙からのメッセージを内包する30億個のDNA、そして自分の根源となる2万4千個の遺伝子によって完成された存在です。

しかも、地球上の誰ひとりとして同じDNAをもつことのない、たったひとりの存在として生まれてくるのです。

私たちに与えられたその生命エネルギーは、この38億年の時間軸上にある、38億年+α(個)の存在時間(すなわちα≒80年という微々たる時間であるということです)。

それにもかかわらず、私たちは「地球上に」生かされている時間」と「生命の神秘」があることを無視し、あまりにもα≒80年という「今」の時間のみを、自分の我と欲で生きてはいないでしょうか。

人間は時間軸上のなかで 生かされている



人間は、潜在的に時間という基準をもっており、それによって連鎖しています。たとえば、心臓はおおむね1秒に1回動きます。これは筋肉の動きによるものです。さらにこの筋肉を動かしているのが1000分の1秒という時間をもつ神経です。そしてこの神経を動かしているのが100万分の1秒の時間をもつ細胞です。人間のもっている時間はこの細胞の時間までです。

ここから先は、生命、物質の根源となる分子や原子の時間であり、これは10億分の1秒(ナノ秒)です。さらに宇宙のもっている時間として、宇宙の誕生を解き明かすビッグバンの時間は、10のマイナス23乗秒と言われています。このように考えていくと、すべてが時間軸上にあることがわかります。

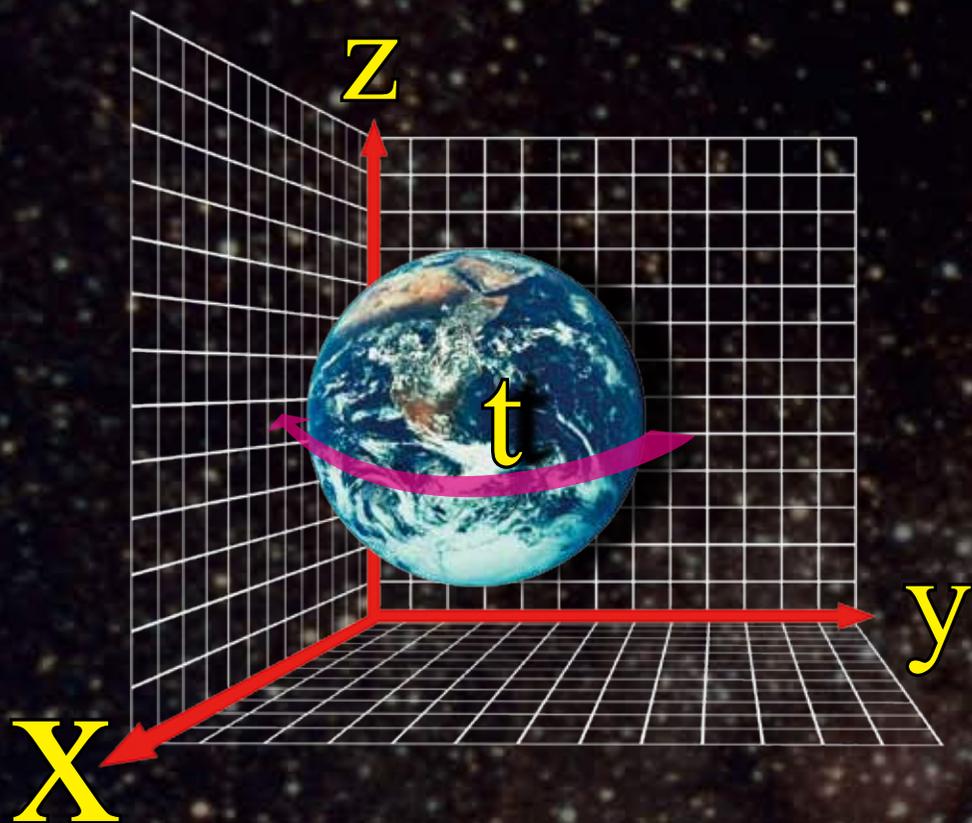
また、私たちは普段、空間は止まっているように感じていますが、その空間を作り出している地球は常に回っているのです。すなわち、人間は常に動いている時間、かつ空間のなかにいるということです。

このことから、私たちは地球上の生命に与えられている時間軸と宇宙の時空(時間、空間)のなかで生かされている存在であると言えると思います。そうした巨大な時間と空間で生かされているということは、私たち一人ひとりの小さな小さな頭の知識ではなく、人間を構成している最小単位の60兆個の細胞こそ、一人ひとりの人間のエネルギーを生み出すものであると言えると思います。

ですから、そういうことを軽視した現在の「頭で考え、身体に命令する」知識偏重の動きは、細胞の働きからすると、その情報量もスピードも桁違いに遅いのです。さらには言えば、お湯に手を入れて「100度だから、熱い」と考えて手を引っ込める人がいないように、すべては「身体先にありき」。頭で考えたことよりも、身体で感じたことが優先するということです。

宇宙

時空と「気」



ニュートンの時代までは、宇宙のどこかに静止している空間座標（XYZ）があるととらえられ、ここに時間（T）が入って四次元とされていた。すなわち空間と時間を別々にとらえていた。しかし、アインシュタインや量子力学では、空間と時間は一体であるという考えに至っている。

宇宙

空間・時間 =

時空

|| 間 ↓ 先 ||



ふつつ私たちは、どこにいてもその空間は固定され止まっているように感じています。しかし現実的には地球は時速10万7千キロで太陽の周りを回りつつ、かつ自転も止まってはいません。この地球が回っていて時間が止まっていないことがわかる最も身近な現象は、朝、昼、夜が毎日繰り返されるといふ事実です。ですから私たちがいる「空間」というのは、空間だけが存在することはあり得ません。この「常に動いている時間」のなかに空間は存在しています。すなわち時間のなかに空間があるので、それが時空です。

私たちは、このように時間をもった地球上の空間、すなわち時空のなかに存在しているのです。

まさに、この時空に気は非常に関連しているのです。

ですから、この時間の存在によって、いろいろなエネルギーが生じて、

ます。武術の「間を制する」は、まさしくこの時空を局所的に制することなのです。

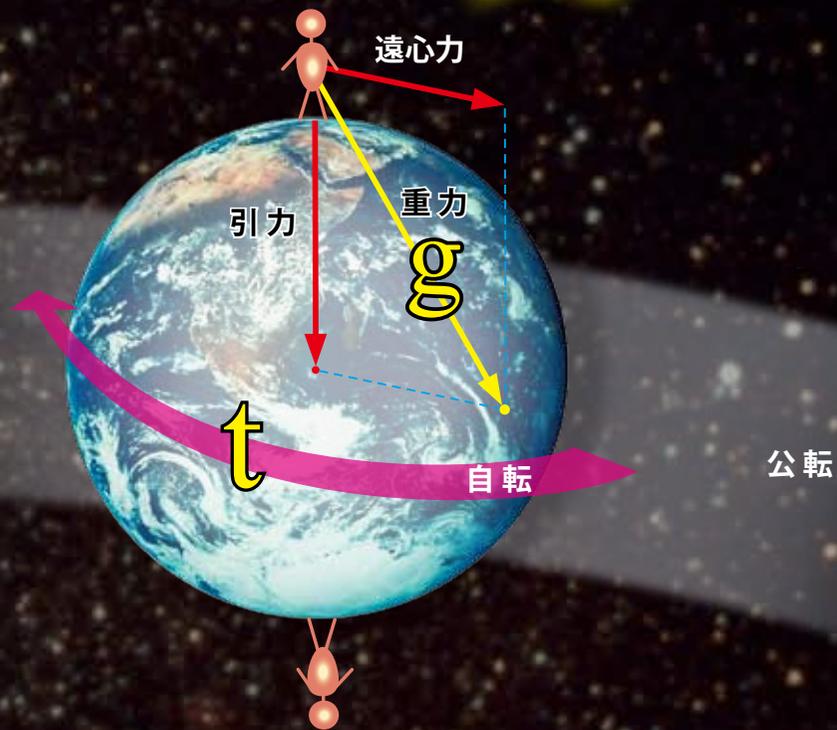
それは、距離を制する場合もあり、時間を制する場合もあります。また時間と距離の両方を同時に制することもあります。

日本伝統の武術は、まさにこの時空を利用するところに、その本質があったのではないかと考えています。それが極意と称され、最もすぐれた方法のルーツとなったのだと思います。その方法すなわち秘術こそが、時間をコントロールするといふもので、自分の内面の時間を自在にすることによって生じるエネルギー、すなわち「気」です。柳生石舟斎や山岡鉄舟の無刀流の根源には、まさにこの「気」による方法があったと考えられます。しかし大事なことは、ルーツは現在に再現してこそ、すなわち実践できてこそ真実であり、知識という「気」は、精神論のパーチャルでしかないということです。気とは目に見えないものだけに、とくに注意したいところです。

重力と「気」

$$Ep = mgh$$

↑
気の作用



今、手に持っているものを放せば下に落ちていきます。物理学者ニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て発見したのが引力。その地球の中心に向かう力を、引力＝重力としたのです。しかし、現実的には地球は常に時速1600キロで自転しています。回っているから地球上の物体には常に遠心力が働いています。ですから正確には引力と遠心力のベクトルの和、これがその物体に働いている真の重力となります。

時間によって生じる最大のエネルギーが重力エネルギーです。

$$Ep = mgh$$

この重力 g [m/sec²] は、加速度と同じディメンションでもありますが、まさに時間によって変わるエネルギーです。実践事例としてここに紹介する「重さが変わる」という事実は、この時間変化を裏づける絶対仮説として今後大いに興味深い研究課題となり得ることでしよう。

たとえば床に寝ている人の身体に気を通すと、体重は変わるはずがないのにその人を持ち上げよう



としても急に持ち上がらなくなり
ます①。すなわち重たくなるという事実です。さらに重要なことは、その人の手足に乗ればふつうは悲鳴をあげるほど痛くて耐え難いのに、乗られてもまったく平気でいられるという事実です。これは気を通せば男性、女性、子供に関係なく起こります②。この事実は、体積は同じでも「気」によってその人の重さが数倍になる、すなわち密度も数倍になっているということでもあります。ですからその分、身体の力も強くなり、最初はまったくできなかった寝たままの投げも勝手にできるようになるわけ③。

この、気を通して重くするという方法は、1対1ではなく、1対100でも同時に、しかも瞬時に再現することが出来ます。こうした力がどこから出るのか、今の科学では説明が付きません。しかし客観性、普遍性、再現性があるというこの実践事実は、まさにニュー科学として、今地球上で私たちが抱える多くの課題に対し、ヒントと力になると思っています。